

ホトトギス

昭和二十八年三月二十八日運輸省特別郵便承認第六二七号  
平成二十八年五月一日発行（第百十九卷第五号）

# ホトトギス

五月号



## 俳句随想〔四百七〕

汀子

「天地有情」の選をして行く中で通信欄からよい勉強をさせて頂いている。また、「俳句随想」を読んで下さる方も多く、私の励みになる。九州のある開業医をしている方から次の、一文があった。「開業して三十年もたちますと子供の頃に診ていた人が親となり子供を連れて来ます。年齢的には私は祖父母の世代なのですがなるべく親の目線と同じにして診ています。〈青春とは人生のある時期ではなく心の持ち方である〉とはサムエルウルマンの詩ですが作句に当たっても常識ではなく新鮮な気持で吟むように心掛けています」と書かれてあった。青春という懐かしい言葉、高齢化社会にある我々と言っても昔の気持ちと一向に変わらないように思っ俳句を作っている我々に、この一文ははっと何かに呼び覚まされる思いがした。

通信欄に次のご質問があつた。朝日俳壇の新春詠に載っていた『記憶せんむすめふさほせうたかるた』の〈むすめふさほせ……〉はどういう意味でしょうか。分かりません。教えて頂きたいとのことであつた。

小倉百人一首はお正月に遊ぶ歌留多の一つである。娘時代、我が家で歌留多会を開いたり、呼ばれて歌留多で遊んだ懐かしい記憶がある。上の句を読んで下の札を取るのであるが、「むすめふさほせ」は上一字読めば下の七七が分かる。例えば「むらさめの……」の「む……」と聞けば、「きりたちのぼるあきのゆうぐれ」の札を取る。斯くなる正月の遊びを一句にしたものである。

句日記 汀子

平成二十七年五月二日 芦屋ホトギス会

誰が気づくともなく八十八夜とて  
植糸替へしこと忘れぬし花水木

五月三日 下萌句会

更衣すませしやうなせぬやうな  
更く高き遠さ活けたる桐の花

五月四日 ロイヤル俳壇

薔薇園の華やぎまとひ来し人も

五月八日 工業倶楽部

大橋を渡る 卯浪の光る中  
咲き初めて牡丹に雨の二日とて

五月九日 四国ホトギス同人会

夕べ会ひ今日又会へて旅五月  
マロニエの花の盛りを又ここに

五月十日 四国ホトギス俳句大会

夏草といふ開放感の夏の雨  
三時間半のドライブ土佐の野

五月十日 有恒俳句会

脱稿へ向けば弾みぬ旅の夏  
句やかに咲き逢瀬重ねつつ

五月十二日 大阪倶楽部

白牡丹華やぎ秘めし色と見し  
牡丹に白は淋しき色ならず

五月十二日 綿業倶楽部

赤ばかり咲いて淋しき牡丹かな  
雨が消すほどの薄暑と思ひけり

五月十二日 綿業倶楽部

薬の日風雨の荒ることも又  
風雨荒れ五月の旅を縫ふやうに

五月十四日 清交社

美穂女さん思ひ出させて葉の日

夏めきて身軽な旅となりしかな  
移植してはや紛れ咲く花水木  
夏めくや体調を先づ心して  
花水木白しは紛れぬ色とこと  
寒暖のきびしき五月なりしこと

五月十五日 アネモネ句会

脱稿に近づいてゐし更衣  
好葉にも風見えてあり灯のこぼれ

五月十六日 北海道ホトギス同人会

捨てられぬ思ひ出ばかり更衣  
なほ北へとる旅路あり若葉冷

五月十六日 北海道ホトギス同人会

離陸して雲抜け出せぬ夏の雨  
踏みしめる大地のありて蝦夷の夏

五月十六日 北海道ホトギス俳句大会前日句会

乱気流抜けて若葉に着陸す  
十階の俯瞰の大地緑濃し

五月十七日 北海道ホトギス俳句大会

涼しさを通り越したる朝の雨  
朝虹を見しと告げゆく旅心

五月十九日 有恒俳句会

虹消えてゆく消えさうに消えさうに  
豆飯の炊き上る香に家居して

五月十九日 無名会

若葉冷さらりと脱ぎて旅帰り  
若楓庭の明るさあるどころ

五月十九日 無名会

旅北へ夏めく心あともどり  
水音に夏めく心置きそめし

五月二十日 夏潮句会

旅の日はや遠ざかり若楓  
ふり返る旅路の遠し夏めける

五月二十日 夏潮句会

離陸する茅花流しに沿ふ加速  
どの部屋もLEDの涼しき灯

音立てて若葉を渡る風の  
旅共にせし今日も又涼しき灯  
庭若葉より水音のほとばしる  
稿債の先見えて来し旅涼し

五月二十一日 クラフ合同俳句会

南風の波高し大橋渡り切る  
新茶かとふたたび問はれをりしこと

五月二十一日 時雨句会

黒南風の吹き渡る日も近か  
新茶淹れややくわが家なりしこと

五月二十三日 句会と講演の会

母の日に近い誕生日を忘れ  
母の日に近い誕生日を忘れ

五月二十三日 句会と講演の会

旅終へていつか夏めく日々なる  
海亀の浜と名付けてただ広し

五月二十七日 稽古会同窓会

自己主張色に出にけり茄子苗  
茄子苗のすくすく育ち留守がちに

五月二十七日 稽古会同窓会

カーテンに又涼風のひるがへる  
戻らざる若さ戻して汗二日

五月二十八日 稽古会同窓会

何と良き気持と汗を拭き乍ら  
若者の心の如く居て涼し

五月二十八日 稽古会同窓会

夏めくや若き心を取り戻す  
冷房は行くほど遠き道汗涼し

五月二十八日 稽古会同窓会

好きなこと言へるが仲間汗涼し  
松蟬の遠くにそれと知られぬ

五月二十八日 稽古会同窓会

卯の花の山路にかりはれめけり  
茅花ゆれ記憶の道にふみ入りし

五月二十八日 稽古会同窓会

山路行く松蟬近く又遠く  
朝の会終へ午後の会汗涼し

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十七年五月二日 昔屋ホトギス会

矢車の先黒々と富嶽かな  
矢車の夜を奏でてゐる孤独  
更衣して聞く医師の言葉かな  
今日八十八夜 阪神巨人戦

五月三日 野分会吾屋例会

烏賊火へと星の存問ありにけり  
六甲の裾持ち上げて初夏の風  
烏賊火燃ゆ日本海を絞り上げ  
葉流さんの武器初夏の曲線美  
異常無してふ初夏の医師の言

五月七日 蕉心会

蠅も来て三角池の賑はひに  
卯浪寄す釣人達の午後の黙  
夏の川釣果気にせぬ竿二本  
五月てふ何かが新しき句座へ  
葉桜を抜けて芭蕉に触れし館  
帰京してより人親し句座涼し

五月九日 四国ホトギス同人会 大会

東京の薄暑を発ちて雨の土佐  
水の黙引つ掻いてゐる水馬  
新緑に吸ひ込まれゆく主翼かな  
桂浜あの辺りとか卯浪寄す

一望の土佐新緑に膨らめる  
買ひもせず日曜市の薄暑歩す  
運転の話はせずに母の日を

五月十一日 朝日カルチャー若草句会

天守閣持ち上げてゐる新緑裡  
万本のさうびと僕は君のもの  
新緑を統べて都庁は天を突く  
土佐薄暑路面電車の軋み来る  
五月十三日 てあとるさつくすCD受贈御礼

音楽と芭蕉との縁 新樹晴

五月十四日 土筆会

外つ国の人も迎へて園立夏  
土佐の旅茅花流しにをさめたる  
五月十六、十七日 北海道ホトギス同人会 大会

果てのなき蝦夷果てのなき新緑裡  
更衣迷うて蝦夷の旅にあり  
新緑の起伏を縫うて着陸す  
蝦夷涼しもちのファンといふ佳人  
余花といふ北海道の良き出会ひ  
雪渓を育んでゐる蝦夷の風  
俳句とは心の若さ蝦夷五月  
新緑の七色といふ大地かな  
青芝をさ迷ふゴルフボールかな  
夢語る真紅の薔薇のやうな君  
夏霧の消えて明かされゆく大地

五月二十日 北國文芸選考会

今日は西明日は北へと旅薄暑

五月二十一日 登高会

太陽になりたいのかも姫女苑  
苗売や生家に畑ありし頃  
袋角ライバル心は失せてゐず

五月二十三日 ホトギス社句会

海亀の未来残して波に消ゆ  
茄子苗の茎紫に暮れてゆく  
茄子苗に朝の大气の濡れてをり  
母語る目差し優し声涼し

五月二十四日 野分会東京例会

蝦夷の初夏とは冷えびえと冷えびえと  
魂鎮め闇を深めて烏賊火燃ゆ  
五月二十六日 若水句会

牡丹の崩れて崩れざる気品  
麦秋や讃岐平野を一と色に  
法の庭てふ牡丹のありどころ  
麦秋の中に危険な二人かな  
鎌形になれぬ悲しみ根切虫  
根切虫土に好みのあるらしく  
五月二十七日 目黒学園句会この日より網膜剝離手術の為六月六日まで入院不在投句

入院も良き休日と葉の日  
卯の花の白を視界に入院す  
もう少し背が高ければ業平忌  
業平忌足跡著き芦屋川  
葉の日葉嫌ひは親譲り  
この斜面使ひ切つたる葉狩

# 雑詠

## 廣太郎 選

島螢の太き指組む聖夜弥撒 直方林 加寸美  
 ネオンなき島のしづかなクリスマス 同  
 どの子にも等しき科白聖夜劇 同  
 虚子と話しぬる吾の夢の覚め聖夜 熱海 嶋田一步  
 今日も温泉プールに聖樹点滅し 同  
 泳ぐ浮く歩くプールに聖樹点く 同  
 底冷や時間潰しといふ難儀 香川 湯川 雅  
 落葉径一人に時間止まりたる 同  
 寒林や好きな時間といふ孤独 同  
 福笑片づけるまで笑ひをり 神戸 後藤立夫  
 年忘てふは未来のある言葉 同  
 色足袋を括つてありし白い糸 同  
 冬濤に突き当るかに島の道 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 磯釣と岩をたがへて海苔を搔く 同  
 冬至の日海に入らんとして燃ゆる 同  
 冬帝や都心の雲はゆるさざる 長岡 安原 葉  
 空路組 新幹線 組旅 小春 同  
 長旅の果てしわが家の柚湯待つ 同

植込みに狸一家の眼が並ぶ 東京 河野美奇  
 風筋といふがありけり北風とても 同  
 寄り道をした覚えなく日短 同  
 襟巻に落ちさうな頬乗せてをり 福山 竹下陶子  
 凧にころがるごとくバス発ちぬ 同  
 二億年前の隆起や山紅葉 同  
 富士を越す頃には晴れて神の旅 相模原 木村享史  
 小さくとも熊手は肩に担ぐもの 同  
 遊びぬる雲も小春でありにけり 同  
 小吉のみくじを託す冬木の芽 神戸 山田佳乃  
 はんなりとどこか著ぶくれたる巫女 同  
 冬の影潜りて尖りゆく疏水 同  
 初鶏や闇引き締める鬨の声 同 涌羅由美  
 暁星を啄み初鶏の鳴きぬ 同  
 初ミサの鐘の響きにある淑気 同  
 妻とぬて冬あたたかと思ひけり 熊本 岩岡中正  
 冬帽をかぶりて兎さんになる 同  
 黄落といふ愛情の降るごとし 同  
 山下りて狸は猫に追はれけり 東京 大久保白村  
 峰寺の墓地の供物は狸の餌 同  
 国分寺跡とは石と枯野なる 同  
 小さき田の畦といねいに塗つてをり 同  
 獅子となり竜となり消ゆ春の雲 同 今井肖子  
 鳥の巢のやがて大樹の一部分 同



# 雑詠句評(四月号より)

くに彦・純也・佳乃  
一步・仁義・霜衣  
しげ人・雅・公次  
さい雪・廣太郎

うと描写したことにより賑わった市の後の、さみしさが良く伝わってくる秀句である。(くに彦)

筆者の住んでいる東京都目黒区にも大鳥神社があり、毎年この季節になると「西の市」が行われる。このお祭の日は面している幹線道路にまで屋台がはみ出る盛況であるが、確かに次の日は全く静まり返っている。お祭の喧騒と、日常の神社の閑散とした様子の対比が楽しく表現されている。(廣太郎)

## 露けしや子規の机に触れてみて 芦屋 黒川悦子

根岸の子規庵に、膝が入るように一部がくり抜かれた愛用の机が保存されていた記憶がある。正座することができなくなったために、そういうふうにしたのであろう。そこまでして、病軀を押して筆を執った子規の姿を思うと、「露けし」と感じたことも納得できるであろう。(純也)

東京根岸の子規庵や、松山でも見た事があり、恐らく実際に規が使っていた実物は大切に保管されていて、触れる事が出来るのはレプリカであろうが、病の為膝を伸ばす事が出来ず、文机の一箇所を削り貫いてある。その特徴ある机に触れた作者のしみじみと偲ぶ姿が見て取れる。(廣太郎)〈以下略〉

## 西の市昨日でありしがらんだう 長岡 安原 葉

西の市といえば縁起物を売る露店が立ち並び、そのひとつみは数十万ともいわれる。たまたま通りかかったのか、日をまちがえて訪ねたのかはわからぬが昨日で終っていたのである。がらんだ

# 天地有情

# 心子選

白寿まで来て未だ鳴く亀に会はず  
 水占の貴船の水の澄むことよ  
 原爆忌昨日と違ふ川の色  
 原爆忌高濱年尾邸の燃ゆ  
 虚子伝へゆかねば露の世を生き  
 存問の雲の来て去る木守柿  
 くすぐつたさうに笑ひて福笑  
 福飴といへるは顔を舐める飴  
 著ぶくれてゆるりと恙治されよ  
 冬枯の性わかるもの知らぬもの  
 漱石の髭のあたりの寒さかな  
 漱石も我も俳人冬木の芽  
 柚子風呂や器量の悪き庭の柚子  
 湯加減や柚子の隙間に手を入れて  
 一病の身を沈めたる柚湯かな  
 クリスマス近き一夜の祝の会  
 顔見世のやつぱり仁左衛門が好き  
 顔見世のはねて夢から覚めにけり

神戸 後藤比奈夫  
 同 稲畑廣太郎  
 東京 同  
 同 木村享史  
 相模原 同  
 神戸 後藤立夫  
 同 同  
 東京 河野美奇  
 同 同  
 熊本 岩岡中正  
 同 同  
 東京 大久保白村  
 同 同  
 山田 閨子  
 同 同  
 神戸 和田華凜  
 同 同

京の日や箸にやさしき蕪蒸し  
 南座のほんに近しや蕪蒸し  
 屠蘇酌みてあらためて我が齢はも  
 冬帝のあやつる雲と日ざしかな  
 自動車を降り見ることに浮寝鳥  
 船着いて発つも動かず浮寝鳥  
 大気なほ寒気を孕む黒南風に  
 黒南風の空に天帝在しけり  
 遊覧船に最後の華と冬紅葉  
 北御堂の梵鐘に街暮早し  
 冬帝にいざなはれつつ来し旅路  
 探查機がとどきしといふ枯野星  
 これよりは米寿の歩み日記買ふ  
 八十路にも貫く気骨去年今年  
 枝折戸を押せば落葉の世界かな  
 昨日今日明日も落葉積もる庭  
 奥飛驒の無骨な錦木粧へり  
 流水の旅に出でゆく落葉かな

大阪 佐土井智津子  
 同 同  
 東京 今井千鶴子  
 同 同  
 熱海 嶋田一步  
 同 同  
 福山 竹下陶子  
 同 同  
 吹田 大橋 暁  
 同 同  
 長岡 安原 葉  
 同 同  
 金沢 藤浦昭代  
 同 同  
 芦屋 黒川悦子  
 同 同  
 富山 若土白羊  
 同 同

## 庭物語（二十一）

### 稲畑汀子

私の怪我也すっかり治って、忙しい日々が戻ってきた。食堂の机の上、仕事部屋の大きな机にも書類が山と積まれてある。全て今年中にしなければならぬ仕事の山である。鹿児島県の出水での国民文化祭の講演も、松山での講演も準備をしなければならなかった。毎週金曜日の朝日俳壇の仕事は怪我のあと三週間ぶりに上京して出席することが出来た。

「うへえー先生！ もう怪我の跡形もありませんねえ」

「はい、汀子に戻りました」

「わあーすごい回復力ー」

朝日俳壇担当の宇佐美さんほ私の一番怪我の酷かった顔の時、お見舞いに遙々来て下さっていた。

朝日俳壇の選句会場では、何時ものような順番で選者席が埋まっ  
つて行く。

「あ！ 汀子先生、お怪我されたのではないのですか？ 何とも  
ないではありませんか」

私の次にこられた大申さんがしばらく経って気がつかれ、声を

かけられた。金子さんも息子さんに付き添われて現れると、

「怪我をしたそうだね。一つも変わらないじゃないか」

「はい、もう治りました」

「へえー」

二週間、上京しないで芦屋で仕事をしながら養生したので元気が戻った。怪我をしたあの日、疲れが溜まっていて、足がよろよろして転んだのかも知れなかった。

しばらく出掛けないで家に滞在しながら久しぶりに仕事部屋から庭を見ていると、マロニエの大き木が殆ど葉を落として庭一面落葉に埋まっていた。見上げると見事な枝振りである。空が透けて見ると何か庭が寂しくなった。出掛けてばかりの日々であったのが、怪我のためにゆっくり家居する事が出来ると、殺伐とした庭の様子が気になってきた。

「櫛の落葉は掃かないでくださいよ」

「はい、承知しています」

大きなマロニエの葉は早速掃き庭の芝生も綺麗になった。

我が家の電気関係の仕事を頼んでいる植田さんが、池へ落とし  
ている水や噴き出すようになってくる水のタイムスイッチが壊れ



たのを直しに来てくれた。

「植田さん、大阪の御堂筋の電飾がすごく綺麗だけど、この庭にそんなようなことが何か出来ないかしら？ LEDでやってくれたら」

「へえ？ それは出来ないことはありませんけれど」

「何とか、我が家の庭を電飾で飾れないかしら。木々の、落葉が終わる頃、何とかやってみたいのだけど」

「はい……考えてみましょう」

十二月に入ると何となく慌ただしい気分追われるようになって、仕事は一向に減ってくれなかった。

怪我也治って毎週の上京もいつものリズムに乗って来た。気になっていた二つの講演も何とか済んだが、まだ大きな選句の仕事が机の上から消えていない。

今年最後になる九州でのホトトギス俳句大会の旅を終えて芦屋に帰って来た。鍵の掛かった玄関を開けて、書斎へ入ると、庭に向った窓のブラインドの隙間から青い光の点滅が見えた。

「え？」

急いで窓を開けて見ると、青と白の光の点滅が見えた。

「えっ？」

私の留守に植田さんが庭を電飾で飾ってくれたのだろうか。

「わあー綺麗！」

しばらく見ていたが、正面の雨戸を開けて、庭に出てみた。

マロニエの木には巻かない方がいいと言った設計士の好川さんの意向を聞いて、霜除の柱と菰を止めた竹と桜の下の四本の柱に電飾が巻き付けたのを知った。雨戸も開け放つてしばらく庭に降りていた私の前で電飾がぱっと消えた。

タイムスイッチが九時に設定されていたのか、時計が九時をさしていた。

